

序

超音波検査は「音」というイメージ、そして侵襲性がないことから「聴診器代わり」といわれますが、私は腹部領域に限っては「触診代わり」と表現しています。超音波検査は“手の下の情報の視覚化”を非侵襲的かつリアルタイムに可能とする検査法です。医療従事者であれば、誰もが手の下の情報を見たいと思うのではないのでしょうか。現在では白衣のポケットに入る大きさの診断装置も存在し、まさに「いつでも、どこでも」超音波検査が可能な時代になりました。このような環境だからこそ、しっかりと超音波検査を学び、その機能を最大限に活用して医療に役立てていただきたいと思います。

超音波診断装置はアナログからデジタルに移行してすでに20年以上が経過しました。記録媒体も紙からデジタル画像保存へと変わり、ほかの画像診断モダリティと同様に、過去画像との比較も容易になっています。超音波検査の弱点とされる客観性の欠如は、実は検査者が超音波をどのようにとらえ、どのような姿勢で保存しているかに左右されます。PC上で資料に印を付けて保存するのと同じように、将来の画像検証を意識してデータを保存すれば、客観性は必然的に向上すると考えています。

本書は、私たちがこれまで多くのハンズオンセミナーや講演会で培ってきた経験を基に、撮影技術の工夫から診断のポイントまでを動画も使用し「一問一答」形式にまとめたものです。ぜひ明日からの超音波検査に役立てていただければ幸いです。

2025年10月

日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野 / 超音波検査室

小川 眞広

推薦のことば

腹部超音波検査を単なるスクリーニングにとどめることなく、その優れた時間・空間分解能を最大限に活用した精密診断へと昇華させる——本書は、この理想を実現するための思考法と手技を、解剖・走査・保存という包括的な視点から体系化した画期的な一冊となっています。

CT・MRI との統合画像を参照することで、正中・肋骨弓下・肋間といった多彩な走査断面の空間認識を明快にし、回転や圧迫などの基本操作一つひとつに理論的裏付けを与える構成は、実に見事というほかありません。

微細血流評価、高周波プローブの選択、飲水法や体位変換の工夫など、診断能を高めるあらゆる手法を具体例とともに提示し、超音波検査が精密検査として十分な実力を持つことを説得力をもって示しています。

また、3学会が推奨する25断面と体位変換8断面を基軸とした記録方法を実践的に解説することで、客観性・再現性・経時的比較という診療の根幹を確立している点も特筆に値します。

本書は、初学者には効率的な学習の道筋を示し、熟練者には盲点となりがちな領域を補完する、まさに臨床現場の要請に応える実践書といえます。画像保存義務化の時代において不可欠な標準化と品質管理の要件にも的確に対応し、日常診療から専門的精査まで、あらゆる場面で診断精度の向上に寄与する必携の書として、強く推薦いたします。

日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野

木暮 宏史